



性格を変える薬

greentea0117

性格を変える薬

私は気が小さい。そのことで毎日悩んでいる。その性格を克服しようと、いろいろと試してきた。一日一回教室で手を上げることにしたこともあった。金を貯めてしゃれた服を買い、見ばえをよくしたことも、外国に旅行してみたりもした。どれもうまくいかなかった。

性格を変えるのは無理なのだと諦めかけたころ、「性格を変える薬」というのが発明され、瞬く間にブームとなった。これだ、と思った。今の技術は進歩している。もちろんまがいもの、ということもある。けれど様々な試験で実証されているこの薬はどうやら本物らしい。けれど、よい値段だ。よし、これを最後にしよう。この薬をためしても無理なら、もうあきらめよう。そんな思いで薬を購入した。

毎日食後、薬のキャップ一杯分の水薬を飲む。まるで子供の咳止めシロップだ。味は苦く、薬草を煮立てたようなかんじ。うん、なんだか効きそうだ。薬を飲み始めて一か月後、会社でプレゼンテーションがあった。大の苦手のプレゼンテーション。今回はうまくいきそうな気がする。

今までのもじもじがうそのように、うまく発表できた。上司は、

「なんだ、やればできるんじゃないか」

と言った。うん、そうだ、やればできるのだ。

いや……でも本当か？ 私は薬のラベルを疑い深く眺めた。様々な薬草の名前が書いてある。だいたい薬を飲んだだけで性格がなおるのか？ いくら科学が進歩したからと言っても……でも科学は進歩しているのだ。うん、私の性格もなおったのだ！ 今までの努力の積み重ね、そしてこの薬のおかげで治ったのだ！

私は思い切って今まで思いを募らせていた人に告白することにした。とにもかくにも私は気が小さく、思いを相手に伝えられたことがないのだった。今ならできる。きっとさらっと言える。多分ふられるだろう。けれどわたしにとっては思いのたけを伝えるということが大切なのだ。

私はその人をデートに誘った。ここまでも今までの私と比べてみれば大いなる進歩だ。自信がなくなりそうになったり失敗しそうになっても、

「いやでも私にはあの薬があるんだ」

と言い聞かせた。その人は会社の同僚だった。いつもの私と違って颯爽としているため、

「なんだか気持ち悪い」

と言われた。あちこちをゆったりとまわった。レストランで食事をしているとき、

「性格が変わったような気がするけど、なんかあった？」

と同僚は不思議そうだ。私はつい薬の話をしてしまった。

「性格が変わる薬？ あーあれ、なんか最近はやってるもんね。でも本当に効果があるんだね」

「うん不思議と」

私は優雅にナイフとフォークを使い、肉を切った。

「ふーん」

同僚はテーブルの上でくるくるとコップを回した。

「でも私は前のあんたのほうがいいと思うよ。たしかに同僚としては頼りなくて迷惑なんだけど、友人としてはね」

私は肉を飲み込んだ。ゴムのような食感がのどを通り過ぎていく。それとともに薬の効力も蜃気楼のようになっていくのを感じていた。